

公共政策大学院に求めたい事―「名こそ惜しけれ」のエリートたれ

京都大学公共政策大学院 名誉フェロー 佐伯 英隆 氏

我々の公共政策大学院も今年設立一〇年目を迎えます。設立当初の第一期生入学試験から本大学院に関わった者として、「感慨ひとしお」と言うのは大げさですが、この度、公共空間から「公共政策大学院生に求める事」について書けとの依頼を受け、丁度良き一つの節目として、日ごろ考えている事等を寄稿させて頂きます。

私はこの十年、「社会のエリート」を育てようとして来ました。皆さんには社会のエリートとして巣立って欲しい。しかし、誤解の無いように。私の申す「エリート」とは、地位や学歴、資格、財産・収入の多寡、ましてや家柄や個人の美醜等とは一切無関係な資質であり、一口で申せば、地位や学歴、財産などの社会的装飾を全てはぎ取った一人の人間として、「あいつをリーダーにすれば、上手く行くのではないか」と、何となく周りに思わせるような、そういう資質の持ち主の事であります。

判り易くするために、一つ極端な例を挙げます。数年前の東北大地震の被災地の真ただ中、偶然生き残った一群の人々が、次を取るべき行

動によって生死が分かれるような極めて非日常的な状況―右に行くべきか左に逃げるべきか、食糧確保に走るか防寒を優先すべきかに立たされたとしみましょう。こういう状況の下では、その瞬間の社会的地位や学歴、お金など何の役にも立たない。背景も価値観も別々で、ただ「生き延びたい」という本能だけを共有するバラバラな個人の集合が有るだけの状況です。こういう状況の場合、殆どと言ってよい程、その場を取り仕切るリーダー的な人が出て来てきます。そのリーダー的な人の判断が常に正しいとは限らず、場合によっては集団として悲惨な結末を迎える事も有りますが、いずれにせよ、その集団が一旦その人をリーダーとして受け入れたら、皆、何となくその人に従って行動するようになります。何故でしょうか。

「ヒト」という生き物は、如何に「個性が大切」、「個の確立が重要」とは言っても、所詮、単体では生きていけない弱い哺乳類です。人類は太古の昔から、集団として存在する事により、自然の脅威から生き延びて来ました。「個人が大切」とばかり、俺は自分の道を一人で行くと集団か

ら離れた人間も居たでしょうが、そういう人間は大概、怪我や病気で孤独に死ぬか、肉食獣に食い殺されてしまったので、その人の遺伝子は現代の人類に引き継がれる事はありませんでした。現在、生存している人類は皆、集団というメカニズムに守られてその生存を確保してきた「ヒト」の子孫ですから、我々のDNAには「集団で行動する事の重要さ」が刻み込まれています。従って、人間は「これはちよつとヤバイぞ」とか「これは重大だぞ」と感じた時には自然と「群れる」ようになります。地震でかなり揺れが酷かった時など、揺れが収まったから皆、外へ出ますね。そして普段は言葉も交わしたことの無い隣近所の人たちと、「いや、凄かったですね」と、ごく自然に会話が成立しますよね。その時の気持ちⅡ「群れたい」気持ちは、我々の体内のDNAの仕業です。

さて、集団が集団として行動するためには、何らかの「仕切り役」Ⅱリーダーが必要です。では、どのような人が「仕切り役」になるのでしょうか。言い換えれば、リーダーたる資格・要件は何か、を考えてみたいと思います。

先ず、自分の事だけではなく、他の構成員の事も考えることが出来るという資質が必要でしょう。人間、誰しも自分が一番大切です。これは個としての生存本能ですから当たり前の事です。しかし、自分だけ、或は自分の身内だけが良ければ良いという人をリーダーに担ぎ上げたいとは誰も思いません。自分が一番大切という前提で、同時に他人である他の構成員の事も（その身になって）考えてやる事が出来るという資質、これが基本です。程度の問題ではありませんが、場合によっては、自分ないし自分の身内が、多少不利を蒙っても（或は、得べかりし利益を若干喪失しても）他の構成員のために何かを為すことも必要でしょう。「公^{おおやけ}の心を持つ」という事です。我が大学院は当然の事です、公務員志望者が多数を占めますが、本心から皆の為に、地域の為に、国家の為に、何かをしたい、そういう気持ちの無い人、「公^{おおやけ}の心」を持たない人は、公務員になるべきではありません。その言葉一つだけを切り出すと誤解を生じるかも知れませんが、「やさしさ」という言葉で表現できるかも知れません。

次に、リーダーたるものは公平・公正でなければ支持されません。公平・公正と一口で言い

ますが、私は公平とは主として内容面において、公正とは主として手続き面において、偏りのない事だと理解しています。他の構成員の事を考えてやる事が出来るとしても、その扱いが特定の個人やグループを厚遇したり、反対に冷遇したりするような者は、リーダーとしての地位を保持する事は出来ません。

三番目に必要な事は、その仕切り役の人の判断、決断や指示の、結果としての「正しさ」でしょう。誤った判断を下し続ける者には、誰もついて行くとは思わなくなるのは、これも当然の事です。しかし、世の中の事は、殆どの場合「やってみなければ、わからない」ので、結果が全てであり、事前に絶対的な正しさが証明できるわけではありません。その前提で「正しい」（鍵カッコ付きですが）判断を下すうえで必要なものは、知識と経験、そしてそれらを適切に当てはめる「知恵」（場合によっては、経験が役に立たないという判断が出来る知恵も含めて）だと思います。教室という学校教育の場で、皆さんに伝授することが出来る事の大部分は、この第三の要素に集中しています。逆に言えば、教室では皆さんにエリートたる資質の一部しか伝授できないので、残りは自分の力で獲得してもらわなければなりません。

そして、最後に、これが一番強調したい事でもあるのですが、公^{おおやけ}の心を持ち、公平・公正で、知恵があっても、それだけではリーダーとして担がれるには不足です。上記三要件を満たした上で、更に周囲の者に「こいつは立派だ」と思わせる「美的な何か・人としての魅力」が必要でしょう。その美的な何かを感じさせる徳目には、正直であるとか、誠実であるとかといった基本的徳目から、不屈の精神力、勇気や潔さ、等々様々あると思いますが、リーダーとして最も重要な徳目の一つであるにも関わらず、近年ことさらに、また意図的に軽視されているのが「名を惜しむ」という徳目であると考えています。これについて少し述べてみたいと思います。

ここで云う「名」とは、「仰げば尊し」に歌詞に出てくる「身を立て、名を挙げ」の「名」であり、平家物語などの武将のセリフ「名こそ惜しけれ」の「名」であります。どのような状況に立たされても、人として恥ずかしい事はするな。名誉を重んじよ。という徳目の事です。私はこれを仮に「名こそ惜しけれ」エトス（持続的特性）と名付けます。これの対極にあるエトスが「命あつての物種」エトスでしょう。

今、世の中は「命あつての物種」エトスが全盛の世です。政治的節操を失くそうが、土下座しようが、議員バッジさえ付ければ勝ちと考える議員達。原則もヘツタくれも無い、「空気を讀ん」で適切に身を処すことこそ勝ち組への道と考えるサラリーマン達。法にさえ触れなければ収益を上げるためには何をやってもいいんでしょ、だってお金儲けこそ企業の使命だから、と信じて疑わない経営者達。自分とその周辺さえ安全・安心で平穩無事であれば、世の中のことなど（僕には、私には）関係ないよ」とひたすら事勿れ、事勿れ、と日々を送る庶民。周囲は「命あつての物種」エトスの人々で溢れています。私が子供の頃には周囲の大人たちが「恥を知れ、恥を」等とよく言っていたのを思い出しますが、近頃「恥を知れ」というセリフはめったに聞かなくなりました。「ハレンチ（破廉恥）」という言葉はまだ生きていますが、「廉恥」という言葉は死語になりかけていますね。近年では、「恥を知る」事より、「空気を讀む」事の方が大事と見えます。このような風潮の中では、「名を惜しめ、名誉を重んじよ」などという考えは「古臭く、封建的で、時代に逆行する権威主義的、或は軍国主義的で危険な考え」として「進歩的な人々」から排斥されています。

しかし、考えてみてください。いかに平穩無事で、健康的な生活を送ろうとも、ジムに通い、ビタミン剤やサプリメントを摂取しようとも、遅かれ早かれ、結局人間は死ぬのです。永遠の命はおろか、二〇〇年も生きる人は居ない。人類の歴史の中のほんの一コマにちよこつと登場しては、直ぐに居なくなる存在です。正しく信長の幸若舞「敦盛」の「人間五十年、化天のうちを比ぶれば、夢幻の如くなり」です。死んでしまえば、富貴卑賤は無関係、この世に残せるものは結局のところ子孫のみ。子孫といえども二世代、三世代と経過すれば、自分を思い出してくれる者も居なくなります。しかし、自分の作った作品、芸術、文章、それに企業体や組織、制度は生きながらえるかも知れない。或は、自分の思想、言動、所業は時を超えて語り継がれるかも知れない。従って、自分の「名」を後世に残せるチャンスに巡り合えば、場合によっては自分の地位や財産、さらには生命までもリスクに賭けて大博打を打ってみるという事も、損得勘定から見ても、決して悪い Deal ではないかも、と考えるのが「名こそ惜しけれ」エトスです。私は決して皆さんに生命財産を投げ出せと言っている訳ではありませんので誤解の無きよう。ただ、大概の場合、「名こそ惜しけれ」エト

スに基づく所業の方が、「命あつての物種」エトスに基づく所業より、周囲には美的に映えるというのも事実です。美的に映るからこそ、時代を超えて語り継がれるでしょう。

すこし話がずれましたが、エリート論に話を戻します。周囲に「こいつは立派だ」と思わせるためには、立派な所業を示さなければなりません。古代から、庶民には許されるが、貴族には許されないこと、兵卒は免れることが出来ても士官には逃げるのが許されないこと、というものがあつたはずで、それはノブレス・オブリージュ（仏：noblesse oblige）という言葉で表現される、時代を超えて世界に共通する「責任感」の事です。また、（人として当然感じる）死に対する恐怖と緊張が支配する戦場で、全軍の先頭に立つて真っ先に駆け出す武者や、一番槍の足軽には、それ相応の名誉が与えられてきた。それは、そのような人達が、核となり、起爆剤となり、前衛となる事によって、「あらまほしき事」に向かって多数の人が動くという効用が認識されて来たからでしょう。エリートたるためには、それなりの責任と所業が求められます。エリートは楽ではありません。エリートはつらいよ、であります。

くだくと申し述べて参りましたが、最初に申し述べましたように、それでも、私は皆さんに「エリート」になつてもらいたい。それも出

来れば「恥を知り、名を惜しむ」エリートになつてもらいたいという事を結論に、話を終えたいと思います。



佐伯 英隆
さえき・ひでたか

一九五一年大阪府生まれ。(株)イリス経済研究所代表取締役、京都大学公共政策大学院名誉フェロー。東京大学法学部、ハーバード大学ケネディ行政大学院卒。一九七四年通商産業省(現経済産業省)入省。資源エネルギー庁国際資源課長、在ジュネーブ日本政府代表部参事官、島根県警本部長(警察庁出向)、経済産業省通商政策局審議官(国際開発、地域協力)等を経て、二〇〇六年〜一四年まで京都大学公共政策大学院特別教授。